

徒然草 参考資料

参考① 主題把握

徒然草第四十九段

本文

老来りて、始めて道を行ぜんと待つことなけれ。古き墳、多くはこれ少年の人なり。はからざるに病を受けて、忽ちにこの世を去らんとする時にこそ、始めて、過ぎぬる方の誤れる事は知らるなれ。誤りといふは、他の事にあらず、速かにすべき事を緩くし、緩くすべき事を急ぎて、過ぎにし事の悔しきなり。その時悔ゆとも、かひあらんや。

口語訳

年老いてしまつてから、そのときはじめて、仏道修行を行おうと待っていてはならない。古い墓は、多くはほかならぬ年若い人の(墓)である。思いもかけないのに、病気にかかつて、突然に、この世を去ろうとするときにこそ、はじめて過ぎてしまった過去のまちがっていることはわかるものだ。まちがいのというのは、他でもない、早急にすべき仏道修行を後まわしにし、後まわしにすべき俗事を急いで、(二生を)過(こ)してしまつたことが、後悔されるということである。そのときになつて後悔しても何のかわいがあるか(かいいないことだ)。

参考② 現代文構造理解(復習)

『街角のエコロジー』

ドブは強力な自浄作用を持っており、そこには自然の営みが見られる。

(具体例)

都会と呼ばれる所にも自然の営みは至る所に顔を出している。

(一般化)

都会の生態系と共存していこうとする愛情を持つべきである。

(主張)

参考③ 例示創作

徒然草第二百三十一段(主張部分)

本文

大方、振舞ひて興あるよりも、興なくてやすらかなるが、勝りたる事なり。客人の饗応なども、ついでをかきやうにとりなしたるも、まことによけれど、たゞ、その事となくてとり出でたる、いとよし。人に物を取らせたるも、ついでなくて、「これを奉らん」と云ひたる、まことの志なり。惜しむ由して乞はれんと思ひ、勝負の負けわざにとつげなどしたる、むつかし。

口語訳

だいたい、趣向を凝らして興趣があるよりも、興趣がなくて穏当なのがまさっていることである。客人のもてなしなども、ちょうど折よく、といったふうに取りつくりしているのも、ほんとうによいのだけれど、ただそれとなく(料理を)持ち出したのが、たいそうよいものである。人に物を与えるのも、何のきつかけもなく、「これを差しあげましょう。」と言つたのが、ほんとうの気持ちである。惜しく思うふりをして、(相手方に)懇願されようと思つたり、勝負事で負けたときの賭け物にかこつけるなどしているのは、見苦しいものだ。

本文

園の別当入道は、さうなき庖丁者なり。或人の許にて、いみじき鯉を出だしたりければ、皆人、別当入道の庖丁を見ばやと思へども、たやすくうち出でんもいかゞとためらひけるを、別当入道、さる人にて、「この程、百日の鯉を切り侍るを、今日欠き侍るべきにあらず。枉げて申し請けん」とて切られる、いみじくつきづきしく、興ありて人ども思へりけると、或人、北山太政入道殿に語り申されたりければ、「かやうの事、己れは上にうるさく覚ゆるなり。『切りぬべき人なくは、給べ。切らん』と言ひたらんは、なほよかりなん。何条、百日の鯉を切らんぞ」とのたまひたりし、をかしく覚えしと人の語り給ひける、いとをかし。

口語訳

園の別当入道（藤原基氏）は、比類のない料理人である。ある人のところで、立派な鯉を出したので、人は皆、別当入道の庖丁さばきを見たいと思うけれども、軽々しく（見たいと）言い出したりするのめいかなものかと躊躇していたが、別当入道は（何事も）心得た人であって、「このところ、（料理の修行として）百日の間、鯉を料理することをしておりますので、今日一日それを欠くようなわけにはまいりません。ぜひとも（この鯉を料理することを）引き受けさせていただけよう。」と言って、お切りになったのは、大変その場にふさわしく、興趣があると人々が思っていたと、ある人が北山太政入道（西園寺実兼）殿にお話し申し上げたところ、「このようなことは、自分には、実にはいや味なこと（もの）に感じられるのである。『切るのに適当な人がないなら、ください。切りましょう』と言っていよう（もの）なら、いっそう立派であっただろう。どうして、（修行のために）百日の鯉を切ろうというのか。』とおっしゃったのは、興趣のあることに感じた人と人がお話しなさったのは、たいそうおもしろい。